

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公彦

蒼蒼

第100号

2001年8月10日 発行
宅配料2年12号1000円
(小額郵便切手可)

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

中華復興の時代

竹内 実

(京都大学名誉教授)

今や二一世紀にはいった。この世紀はどのような展開をみせるだろうか。中国にたいする観測でいえば、中華復興の時代、と呼びたい様相が、しだいにあらわになるとおもつ。この世紀の入口に立って、わずか一年か二年、世紀の終わりまで見送すことができるわけがない。したがって、中華復興の時代、かくると、予言できるはずはなく、できないのを知りながら、このようにのべるのは、不謹

慎である。

ただ議論をはじめるところにあたって、冒頭でこの議論がどのようなところにたどりつこうとしているのか、あらかじめあきらかにしておきたいと思つたまでである。

議論をはこぶためには、このようなところ(結論ともいえるが)にたどりつくためには、いくつか概念の整理をしなければならぬ。そのひとつに、中国とはなにかという設問がある。

中国とは何か／中華思想の原理

中国とは何か？

この問いはしばしばもう一つの問いとあわせて問われてきた。

中国はどこへ行くのか？

本稿ではもっぱら、中国とは何か「について」のべる。

答えは千差万別、多種多様、なかにはつぎのような答えもある。

・中国はわからない。

じつはこれが唯一の正解だといえなくはない。しかし素直にこうも答えることができない。

・中国は大国である。

正解である。

だれでも一度は念頭につかぶ答えである。

ではどのような大国か？

・人口が多い。

・国土が広い。

・歴史が古い。

このような三拍子そろった国は地球上、ほかに見当たらない。たしかに大国といえる。

しかもそこに生まれて暮らしている人間は、口に出していうことわざとを問わず、三拍子そろっていることを知っている。知っているというだけの人もいれば、それを誇りに思っているひともいる。あるいは嫌悪を感じているひともいる。ときにこうした自信(もしくは自認)が表面に突出し、この大国の外部にいる人間は鼻白む。そして、突出した表面にレッテルを貼る。

・中華思想をもっている。

つまり、三拍子どころか四拍子そろっているのだ。

中国は大国である。

中国は大国だ。

おおざっぱな数字をあげてみよう。四拍子のうち三拍子についての数字である。

・人口は一三億以上。

・国土面積は九六〇万平方キロメートル。

・歴史は四千年(河姆渡遺跡は七千年前に遡るが)。

人口が多い

人口が多いということは、国内に難しい問題をかかえているのに他ならない。さらに二一世紀中葉には一六億にたつする勢いをもっている。これは近隣諸国にたいし有形無形の圧力をかけることになる。

二〇〇一年一月に実施された人口調査（第五次全国人口普查）の数字をかかげよう。

総人口：一二億九千五十三万人。

大陸人口：一二億六千五八三万人。【福建省金門、馬祖などの島を除外した三一の

省、自治区、直轄市および現役軍人の人口】香港特別行政区人口：六七八万人、マカオ（澳門）特別行政区人口：四四万人。

つまり、台湾を除いた中国の総人口は、だいたい一二億七千三〇〇万人とみななければならない。ちなみに台湾省および福建省金門、馬祖などの島の人口：二千二百八万人。

人口増加率はといえば、一九九〇年七月一日（第四次全国普查）には一一億三千三三六八万人であったから、一〇年四月月で一億三千二二五万人増加したわけで、毎年平均一千二十七万人が増加し、年平均増加率一・〇七％だったわけだ。

大陸では総人口はあらずし一二億七千万人だから、一％としても毎年一千三〇〇万

人ずつ増えることになる。二〇〇三年じゅうにはだいたい一二億を突破しよう。

そこで「中国」をとらえようとするにさいしては、人口は 一三億以上 という概念で考えてよい。

国が広い

四川省を例にあげよう。重慶直轄市をぶくめ人口は一億一千四一九万人、広さは五七万平方キロ。三七万余平方キロの日本の一・五倍よりまだ広い。長江（揚子江）上流の奥地に、このような省が存在するのだ。

川の流れも長い。長江は六三〇〇キロメートル。アメリカのミシシッピ河、ロシアのヴォルガ河はそれぞれ三七〇〇、三三〇〇キロメートル。

問題は中味だ。

国土に詰まった中味といえは、まず第一に人間だろう。人間は人口としてとらえることができるのとすると、一三億以上がここに存在している事実重い。人口も一〇億を超えると、たんに一億の一〇倍、一〇何倍という以上の現象や紛争が起りうる。想像を越えるだろう。

そこで、逆に考えると、そのような膨大な人間集団が一つのまとまりとして存在する（存在している）ことも事実だから、これは

自発的にまとまっていると考えざるをえない。紛争や対立がないわけではないが、われわれはまず、それが、まとまっている、という事実（一三億以上の存在形態）に注目すべきだろう。

では、なぜまとまっているかといえは、すでにのべた四拍子にふくまれていたが、長い歴史を背負っていること、そして中華思想という思想が存在すること、この二つを指摘したい。

歴史は長ければよいというものではない。長い歴史は人間を束縛するが、束縛されることによつて、まとまっている。これは、否定できない。

古い歴史を誇りに思うのは束縛でもある。しかし、そこには誇りがある。

歴史を誇りたいのが人情である。

中国はおそろしい

このような大国が存在するとして、外部の世間一般に見られるのは驚嘆の表情である。島国の人間は、しぜんところつつぶやく。

中国はおそろしい。

これは中国語ではぶつう、「可怕」と通訳されて、物議をかます。「中国が」侵略してくるのではないかと「島国のわれわれが」恐怖を抱いている、ということになるからだ。

むしろ「可畏！」と通訳されるべきだ。孔子が「後生、畏ルベシ」といった「畏」で、これには尊敬の気もちがある。しかし「可畏」には「畏怖」の感情もまじる。

四面、海にかこまれ、温暖な気候にめぐまれた島国の人間は、海のむこうに存在するものに憧れ、それとともに畏れも抱いた。

畏怖は嫌悪に転じ、反撥し、拒否するようになる。かつて唐の文化を先進的なものとして熱心に吸収した平安朝のひとつとは、やがて遣唐使を廃止し、平がなを発明、平がなによる表現を発達させるにいたった。それには、こうした心理が深層にはたらいていただろう。

中国から漢字文化をうけいれていた朝鮮、ベトナムが、それぞれ諺文を発明したり、ローマ字を使用したりして、漢字を使わないのも、反撥のあらわれである。

憧憬 畏怖 吸収 嫌悪 拒否

順序だてての変化ばかりでなく、同時に一挙に、はたらいでもいた。

こうした心理的葛藤は、なにも中国にたいしてのみ、はたらいたわけではない。ヨーロッパ文明にたいしてもはたらいた。

勃発した当時、「大東亜戦争」と称された戦争は、ながいあいだ、ほとんど太古の昔から文化の輸入にあけられてきた島国の住民

が、外来文化の吸収にあきあきして、これを拒否する行動に出たものといえる。外来文明、外来文化にたいする一種の総決算だった。この心理は今も消えていない。

「近代」というモノサシ

さいきんはあまり使われなくなったが、当時、「近代」という用語が日本のインテリ（知識人と呼ぶより、インテリと呼びたい）のあいだでよく使われた。「大東亜戦争」が勃発すると、「近代の超克」が流行語になった。戦後もかなり長い間使われていた、この

「近代」という用語のイミはよくわからない。日本のインテリはこういう摩訶不思議な用語を弄ぶのが好きで、トランプのカードのように、「近代」をやったりもらったりしていた。

ようするに明治維新以後、日本が必死になつて輸入したヨーロッパの文化、文明のことである。これを必死で吸収して、日本は今や近代に参入したという自己評価に到達したのだ。

これを「超克」とするというのはどういふことか。

はっきりはいわれなかったが、ようするにヨーロッパ文明、英米の文化をありがたがること、これをお手本とすること、をやめ

ようということだった。

圧倒的な流行語となった、「近代の超克」を課題にかかげた座談会が二日間にわたってひらかれた。しかも参加者はめいめい論文を提出もした。じつさいに座談会がおこなわれたのは昭和十七年七月三十一日、座談会と論文が掲載されたのは「文学界」同年九月月号／一〇月号（一九四二年）、さらに単行本も刊行された（翌年七月）。

英米にたいする宣戦の詔勅は昭和十六年二月八日（一九四一年）。座談会がひらかれたころは、また戦局は不利とはいえず、三年のちの昭和二〇年八月一日（一九四五年）、敗戦の詔勅が発せられようとは誰もおもっていなかった。

座談会の内容は富山房百科文庫『近代の超克』（一九九〇年二月刊、八八〇円）によって読むことができる。いまこれを読んで感じるのは、座談会の出席者の誰もも言及していない事件があるということである。じつはかれらが震撼したであろう事件が、ヨーロッパで発生していた。これに言及しないのは、逆にこの事件が大きな衝撃を日本のインテリにあたえた証拠である。

ドイツ軍によるパリ陥落である。昭和十五年六月一日（一九四〇年）。

パリ陥落は、ヨーロッパの文化にたいす

る日本のインテリの夢、憧れ、教養のよって立つ基盤をうちたくのにじゅうぶんだった。これと前後してドイツの哲学者シュペングラー Oswald Spengler の『西洋の没落』の翻訳が出版された。これも座談会では言及されていないが、出席者のすべてがこの書物を読み、その趣旨を認めて発言していることは明らかである。シュペングラーによれば、文明は生命体として生まれ栄え、ついで生命を終えるものであった。

シュペングラーが一般的に「文明の法則」としてのべたことを、日本のインテリはヨーロッパ文明の衰微凋落の予言としてよみ、フランスというヨーロッパ最高の文化の代表的存在がドイツのナチズムに敗れたことよって、「ヨーロッパ近代」という価値は、はかなくも消滅したと受けとったのである。

さらにいま一つの「世界的立場」とうたった座談会が昭和一六年から翌年にかけて、三回にわたって『中央公論』に掲載され、『世界的立場と日本』として出版された。昭和一八年三月。

西洋中心であった「世界史」にたいし、いまや日本が積極的に関与し、世界史は今後これによって展開される、という趣旨である。中国文明を受容しながら拒否へとうい

た心理を説明しようとして、話がそれた。つまり、日本が中国でなにをしているかは座談会の問題にならなかつたということである。ただの一言も言及されていない。憧憬にはじまって拒否におわるのでなく、無視におわつた文明吸収の構図である。当時の日本のインテリの考え方、考え方の枠組みは、いまも消えていない。憧憬 畏怖 吸収 嫌悪 無視

大国がもたらす圧迫感

中国を大国と認めたときから、中国のまわりの地域のひとびとは心理的な圧迫をうけた(うけていた)ということである。

文化を輸入する側としては、その文化の価値をみとめればみとめるほど、反撥し拒否する心理がはたらく。

そうした心理が、また意識下にあるのが、いまの日本の学界、あるいは世論ではないか。中国脅威論に傾くいっぽうで、中国崩壊論がとなえられる。さらには、中国に対処する処方箋を(頼まれもしないのに)考案して、七つか八つの小国として分立するがよい」とか、「各地域が独立して連邦をつくるのがよい」とか。

「中国は大国ではあるが弱い」のか、「それでもやはり強い」のか。

これらは根っこのところでは共通する。これらについて論じるとすると、つぎのようになるだろう。

以下、枠で囲んだのは、ことし「平成一三年」の一月の対談でわたしが述べた部分の引用である。引用に当たって語句の修正をわずかにくわえた(毛里和子との対談「『大國』中国 実像と虚像」『世界』二〇〇一年三月号)。

中国は大国であるという認識は、日本における学界、あるいは世論一般の認識なのでしょね。そこには中国は覇権主義にいくのではないか、という日本の民衆が漠然と抱いている不安も含まれていると思います。「大国」と認識したあとで、日本の学界や研究者は、いまの中国が抱えている国有企業のリストラとか、市場経済での諸問題とか、農村の後進性とか、いろいろな負の要素を引き算していきますね。そして、大国中国の像を薄めようとする。胸をなでおるすわけです。

問題はそれでけつぎよく、何が残るのかということ。いくら引き算をしても、周りの国や地域がらすれば、中国は霸権的だというイメージは拭い難い

でしょう。それは伝統的に周囲が中国に
対して抱えていた恐れであり、悩みであ
り、憧れの源なのです。

引き算をする中国観

「それだけつきよく何が残るか」は、こ
ういった引き算の発想にむけられた問いである
が、引き算の結果の答えは、たぶん「何も残
らない」だろう。したがって「むなしさ」を
感じるわけだ。そのいっぽう、ああやっぱり、
たいしたことはないのだ」という安堵の気も
ちをいだくことができる。

せっかく、「中国」という存在に眼をむけた
のだ。広い国土という横軸と、古い歴史とい
う縦軸の交差するところに注目してはどうだ
ろう。そこには人間が存在する。量的には人
口であるが、人口の中味をみてはどうか。
どのようにかれらは生きてきたのか、どの
ような存在なのか。端的にはこう答えられよ
う。

・社会主義を実現すべくたたかってきた。
この「たたかってきた」はかれらの愛用す
る表現であって、かれらの文脈でみればこう
なる。努力した、嘗々としてはたらいてきた
でもよい。では、どのようにはたらいてきた
のか。「中華人民共和国」という国家が現実

に存在する以上、これが成立していらいの
歩みをみてみよう。

十年一区切りの歴史

実感的にふりかえるのがよいだろう。ま
な板の上に一本の青首大根を置いて、程よ
くあいだをおいてチョンチョンと輪切りする
ように、歴史を十年ごとに区切ってみよう。

そうすると一切れ一切れ、歴史はそれぞ
れが特徴をもつてつぎのように、あらわれ
てくる。一九四九年一〇月に新中国は成立
しているから、四〇年代という一切れもあ
りうるが、ここでは五〇年代を最初の区切
りとする。

中華人民共和国が生まれた一九四九年
から説き起こしますと、五〇年代は、社
会主義の時代でした。カッコつぎの
「社会主義」です。五年の一人あたり
GNPは推定五六ドル程度で、当時の
先進国における工業化開始の時期のG
NPは二〇〇ドルといわれていました
から、約四分の一です。

六〇年代は政治的批判の時代でした。
思想改造や思想闘争など、つきからつ
ぎへと政治的なキャンペーンが行われ
て、思想改造を要求する運動がくりひ

るげられました。やがて文化大革命が
一〇年続きます。ただし、これは六〇年
代と七〇年代にはさみこまれ、また
がつています。

七〇年代は外交転換の時代です。それ
までの社会主義圏から離れて、アメリ
カと接近し、日本とも国交を回復した。
そのピークが七八年の日中平和友好条
約の締結です。

八〇年代は日中摩擦の時代。八一年に
は宝山製鉄所のプラント建設をいきな
り中止したり、翌年には教科書問題が
起きたりしましたが、八九年の天皇訪
中要請（訪中は九二年）で、いちおう円
満に締めくくられます。

九〇年代は歴史認識の時代でした。九
七年の香港返還に特徴づけられるよう
に、中国が歴史というものを再確認し
て、日本にたいして歴史認識を強調し
てきた。

民主化・人権問題

輪切り史観はわかりやすいので、だいた
い問題が落ちるばあいがある。たとえば、天
安門事件である。

きっかけは胡耀邦前共産党総書記が急死、

それを悼んだ学生が天安門広場にデモ行進した。ついで座りこみ。これはいったん解散したが、ハンガーストライキを叫ぶあらたなうごきがあり、市民の同情をあつめた。

学生は、「対話」を求めたが、政府当局は対応せず、戒厳部隊による武力解決がおこなわれ、市民、学生、および兵士に死傷者があった。波紋は東欧諸国に飛び火し、「ベルリンの壁」が崩壊、東西両ドイツの統一、旧ソ連邦の解体、そうじていえば社会主義国ぜんたいが雲散霧消し（例外はある）、アメリカ対ソ連という二つの超大国の対立の図式がここに消えた。したがって天安門事件はけっして小さくないのである。

この事件は民主化運動のかたちで海外で継続され、アメリカの人権擁護運動がこれを支援している。法輪功という宗教団体に對する取り締まりにも、人権抑圧が指摘されている。

しかしながら、まるで、「錦の御旗」のように、「民主主義」や「人権」がとりあげられる傾向について、わたしは無条件で同調する気になれない。

歴史認識が強調されたい、「共同宣言」（一九七二年）にはじまり、「日中平和友好条約」（一九七八年）、「天皇訪中」（一九九二年）とつみかさねてきた日中関係が一顧だにさ

れなかった。これは、わたしには不審だった。中国側は、その後、こうした過去をつみあげを評価するのとべている。したがって、蒸しかえす必要はないが、「過去を超えて重要なのが、歴史認識だ」という説明が、中国から来日した研究者の代表団によって語られた。

研究者といっても、中国のばあい、日本の研究者とはちがう立場の人がいるから、これが学界ぜんたいの考えだとはいえない。とはいえ、時代の変化というものはあるだろう。

「日本において若い人は、日本の近現代史をよく学んでいない傾向がある。近代日本が経験した、国としての歪みや欠陥、近隣諸国に与えた犠牲について、もっと若い人の理解を深める必要がある」と考える。とは明石康元国際連合事務局長の発言である。国分良成・藤原帰一・林振江編「グローバル化した中国はどうなるか」新書館、二〇〇〇年九月刊。一五頁。

中国では周恩来、日本では松村謙三、岡崎嘉平太、といった諸氏が人間どうしの信頼をつみあげ、毛沢東・ブラス田中角栄、太平正芳の協同作業（わたしは協同作業だったとおもう）によって実現した日中関係の歴史は、ほとんど忘れられようとしている。

そうした時代の変化を反映して、「歴史認識」の問題が出現したのだ。

輪切り史観としては、こうした時代相が十年を区切る根拠になる。

では今年以降の二〇〇一年はどのような時代か？ 中華復興の時代だとわたしは思いますが。そこでは中華思想が最大限に發揮されるでしょう。しかし、今後の一〇年で中国が覇権大国として勢力をふるえるかどうかは疑問です。もし大国的な実体が生まれるとすれば、生活水準から考えて、まだあと三〇年ばかりではないでしょうか。ただし、人口が多い、国土が広いという二点における、大国、という要素は変わりませんが、地理的条件ももっている中国の優位は動かないだろうと考えています。

社会主義というもの

この「輪切り歴史観」は、中国の歴史は中国の歴史としてみても、という意図に出発している。現代史も歴史である。

日本の知識人（ここからは知識人とする）の文章は、まずはじめに国際的な状況をのべるのが慣例のようになってい

的な流れがA B Cと展開しているから、日本もA B Cと対応すべきだという文章構造である。A、B、Cはさいきん流行の用語だったり、国際的な事例、とりわけアメリカの事例だったり、アメリカがつきつけてくる日本にたいする要求だったり、である。さいきんの「グローバルリズム」論議もそうだ。しかし、中国を論じるに当たっては、わたしはこうした状況主義、つまり第二次世界大戦後の「冷戦構造」のなかで新中国が成立した、というマクラを置いて議論しない。したがって、「社会主義」についても、中国が必要にせまられて、採用した制度だったとみる。

たしかに新国家成立にこぎつけるまでのあいだ、中国共産党が共産主義の理論にもとづいて、(しかし理論を実行するさいには改良をくわえて)土地革命をおこなったのは事実である。したがって、社会主義圏に加わったのは唐突でない。

けれども、のつびきならない現実的な必要にせまられて、中国は「社会主義」による国家建設を採用した、とみるべきだ。火事場に消防自動車がかかけつけるように、である。

建国したばかりの中国を火事場にたとえるのは礼を失するが、げんに火災は発生しているのだから、火事場に「社会主義」という消

防軍がかかけつけてくれてよかったのである。間に合わせという語弊があるが、とにかく間に合わせる必要があった。全体を構想したり体系的な理論で飾ったりすることはあともわしの、カッソツきの「社会主義」だった。理論がなかったとはいえず、いまでも、たとえば、京都大学ちかくの本屋さんの、「一冊百円」という道端に出してある八口に、中国社会主義理論の解説書をみかける。まじめな研究者をひきつける「理論」はあった。しかし「社会主義でいこう」と決定したとき、決定した人たちに、このような「理論」があったかどうか。

六〇年代の「雇用」問題

いまにしておもえば、新国家が解決しなければならなかったのは、社会主義についての美辞麗句をこねまわすことではなく(美辞麗句も必要だった)、雇用だった。これはかくれたキーワードとしていまもつづいている。人口が多いという事情が生んだ難問である。

中国共産党は寛大政策をとり、国民党政府の職員や軍隊を国民党政権からひきついだ。やがて人員整理をおこなわざるをえなくなり、政治的批判によって、それらの人員の一部はリストアップされ、そのあとの空白を

新社会で育ったひとが埋めていった。しかし、人間の数は減少しなかった。人間を絶滅させる政策など夢にも思いうかばなかったのだ。

六〇年代、求職人口の増加に応じるだけの職場はなかった。新中国は雇用問題を解決する職場をつくりだすことができなかったのである。これが文化大革命の発動をうながすきっかけにもなったとおもつ。

高校生、大学生が農村にいったため(というより農村に追いやられたので)、都市における就職難は表面にあらわれずすんだ。しかし、いつまでもつづかない。やがて「改革と開放」政策がとられ、これによって、外国からの投資がみとめられ、新設された工場によって「雇用」が促進された。いまでも継続している「雇用」解決策である。しかし限界はある。

伝統への回帰 中華思想

外国の投資は歓迎されたが、これに伴う外国文化の流入は反撥を生んだ。伝統的な文化への回帰がうながされた。

「伝統的」なものには、古代からの伝統ばかりでなく、中国共産党成立いらいの革命運動によって、もたらされたものもある。しかし前者といえども、中国共産党の教

育宣伝活動と矛盾しない。ところが日本では古代からつたわる伝統への回帰、あるいは古代をたたえての伝統的なものへの回帰にたいしては、左翼、あるいはカタカナで書く「サヨク」によって猛反対された。左翼、サヨクは愛国に反撥し、民族に反撥し、国家に反撥し、おおよそ「国家」「国籍」に附帯するさまざまな義務的なものは消滅すればよいと願っているとしかみえなかつた。代つて右翼が、日本では愛国になつてゐる。ところが、日本の右翼がになう愛国を中国共産党はかかえこんで来た。

いまでは、日本では、左翼、右翼といった用語は、あまりもちいられず、どちらも色彩が鮮明でない。左翼、あるいはカタカナで書く「サヨク」といつた定義も、いまの日本でどれほど実体に迫つてゐるか。

別な規定のしかたがあるだろうが、いまのところ思いつかない。ようするに共産党といへば左翼というのが常識であるが、中国共産党は左翼でありながらこの常識を破る、ということをわれわれは知る必要があるといひたいのである。

愛国的といふこと

中国共産党としては、共産黨員であること、愛国的であること、民族的であること

とは矛盾しない。

中国の権力交代においては、このような精神的志向からはずれた権力も、政権もなかつたし、あつたとしても民衆の支持をえられなかつた。傀儡政権は必ず崩壊する。というのが中国政治史の教えるところである。

これは民衆の集団意識としてとらえることができよう。そのときときの権力者、あるいは新時代の指導者をもって自任するひととは、この集団意識を無視できず、むしろ寄り添つた。そこに「中華思想」ともいふべきものの強みがある。

ここにいう「中華思想」は世間一般でいわれるものと共通する用語であるが、しかしわたしは、この世間一般の「中華思想」と同じ次元で論じてゐるのではない。

権力は(民衆に)より添つただけでしようね。変わらないものは何かといふことが外側からは「国家」として見るよりしかたがないけれども、実際は一つの精神がすつと(内部にあつて)つづいてゐると思う。その精神が中国のいまの制度にもなつてゐるし、手続きにもなつてゐるし、その一部は国家としての骨組みにもなつてゐる。

じゃあそれは何だと聞かれたら、けつ

きよくは「中華思想だ」と答えるしかない。中国人にしてみると、かりに国土の半分が占領されても、中華思想を自分が持っているかぎり中国は滅びない、といふ考えに到達する。

これを「幻影」だとか「幻想」だとか、一蹴するのはたやすい。

中華思想は「幻想」か

中華思想を「幻想」とみるのは、いわゆる「近代主義」であろう。民族意識(ナショナリズム)一般を諸悪の根源とみる「サヨク」的な考えである。「中華思想」は実体として存在した(する)となつたしは考ええる。

「幻想」であり「諸悪の根源」であるとしても、拒否することによって消え去るものではないから、実体として考えべきだ。といふのが、わたしの立場である。

実体はありますよ。近代思想の持ち主には、実体が見えないだけの話です。気も一つの実体です。異民族によつて征服された王朝も含め、中国は文化的には一体であるし継続してゐるのです。

「中華思想」という思想

「中華思想」は端的にいうと、次の二点に集約される。

- ・ われわれはまん中にいる
- ・ われわれは繁栄している

足で立って歩くようになって、人類はものを考えてきた。歩くことで他者（他人）とてあい、他者がいるのに驚き、そこではじめて自分というものを認識し、自分がどこにいるかを考えるようになった。そのとき、自分のいるところが、まん中だ、中央だと考えたにちがいない。このときの、自分、は、いまのわれわれのような個人ではなく、集団であったろう。まん中という概念がいつころ生まれたかはともかく、そのように考えたのはごく自然なことだった。

まん中、つまり中央にいると自認する以上、周りをつまみ周辺ということになり、周辺はこの世界の果となる。繁栄していると自画自賛する以上、周辺にいる別の人たち、異人種はさほど繁栄していない、文化的におくれている、とみるようになる。

中華対夷狄 という図式がこうして成立する。

これは一種の世界観である。世界像といってもいい。

これを「中華思想」と呼ぶのは外部からみて名づけたもので、「中華思想」のもち主とされる、中国大陸の中原のひとびとがこのような命名を自らおこなったことも、自ら宣言をしたこともなく、解説したこともない。自らを中国となつたことはあるがこれと「思想」を「思想」として命名することとは別である。

外部の人間は、不可解なこと、不条理なことを、「あいづらは「中華思想」だ」といって、レッテルを貼ることによって終わっていった。

本人のあずかり知らぬところでレッテルを貼られ、レッテルにさまざまな内容がぶくまれることになったが、上にのべた二点がこの思想の根幹、素朴な内容である。

普及版の百科事典ともいうべき辞典『辞海』をめぐっても、「中華思想」という項目はあがっていない（一九八九年版）。

しかしながら、「華夏」という項目があつて、だいたい「中華思想」に該当する内容が解説されている。

華夏

諸夏ともいふ。漢族の先民【遠い先祖】あるいは中国（中原）の古くからの呼称。『春秋左氏伝』の襄公三十二年の条に「楚

は華夏を失つ」とあるのが、はじめて文献にみえたものだというのが通説である。

【この華夏は中原の地をいっている】

「華」と「夏」を分けていった例が多い。

「華」の意味は「栄える」であり、『説文』華の部、「夏」は「中国の人」ということ（『説文』夏の部）。『説文』は後漢の許慎があらわした字書】

ここでは「中国とは「中原」という意味である。『尚書孔氏伝』尚書は『書経』とも称する【に「冕服采章【いがめ

しく、模様のついた服装】を華といい、大國を夏という」とある。

孔穎達【唐時代の学者五七四 六四八】の疏【注釈】に「中国は礼儀が発達しているので夏と称し、服装の美があるので華という」とあり、さらに「華夏とつづけて称するのは中国の呼称である」とある。

古代においては、つねに「夏」を称するのには「蛮夷」あるいは「蛮」と対にした

り、「華」を称するのには「夷」と対にした

たりして、文化のちがいと種族のちがいをもって、尊卑や貴賤を区別する基準としたのである。

実際には、太古の華夏の系統は羌、夷

戎、狄、苗、蛮らの一部の部族がともど

も融合混血して形成されたもので、華夏にはこれらの民族が含まれている。

紀元前二二一年、秦の始皇帝は華夏を主体とする統一的多民族国家をたて、広い居住区域のなかで、「車は軌」「馬車の車輪のはば」を同じくし、「書は文」「書体」を同じくし、「行いは倫」「道徳的なさまり」を同じくし、華夏はかたまつた族体を形成しはじめ、漢民族形成のために基礎をかためた。

秦漢以後、華夏という称呼にかわつて秦人、漢人、さらには唐人と称されるようになった。しかし、「華」が中国民族の概念をあらわすことはつづいた。近代になって、「中華民族」という概念があらわれてからは、これが中国の各民族の総称となった。

『辞海』(一九八九年版編印本) 上海辞書出版社一九九〇年二月一三三八頁。

【一】は引用者による説明。

「ゴチャまぜ」の思想

以上の解説を読むと、『辞海』のこの項目の筆者は、「中華思想」(かれらはむしろ「華夷思想」と呼ぼつとしていた)の実体をさ

がすのに苦労しているよつな印象をうける。まず「中華民族」という実体があつて、その思想的反映として「中華思想」がでてきたとしないことには、おちつかないよつである。しかし、まず「中華思想」があつて、しかるのちに「中華民族」が形成されたとしても、こつうにかまわれない、わたしはおもつ。

国際関係のなかで中国を見よつとする、極端にいえば国際関係論という枠組みだけから中国を見よつとする研究者や学者からみれば、こつうつた、「中華思想」は概念のゴチャまぜでしかない。かつて中国が歴史上最大の版図だった時代の自己認識としての地理的概念と、中華文明・中華文化といった場合の文化的概念と、中国という政治的世界としての政治的概念とが、きつちりと区分されていらない、といつて非難する。

あるいはそつうであらう。しかし、そもそも現に存在する中国は、国際関係論や政治学やもろもろの分化した「学」のために存在しているのではない。研究者や学者が考案した「法則」や「概念」を証拠たててやる義務はないのである。研究者や学者の学説がいかに正しいか、その事例として引用されることに協力する必要もない。

わたしはこつうな奇をてらつて、このよつなことをいつているのではない。あるが

ままの中国についていつているのであつて、わたしの言説が矛盾しているとすれば、それは、中国が矛盾しているのである。

まえのほつで要約したよつに、「中華思想」の原理はいたつてかんたんなのである。

尊皇攘夷の思想

それは日本にもかつてあつた思想である。

いまの国家を枠組みにして歴史を考えるのはぐあいが悪い。昔はベトナムもモンゴルも国としてはなかつた。『古事記』にいう「豊葦原の中つ國」の「中つ」も、じつは「中華」です。

周りの国はみんな中華思想をもらつてゐる。近代に入って自分たちの独立性を主張しましたが、肝心の概念はすべて中華です。幕末の維新の志士の「尊皇攘夷」だつて、中華思想です。

わたしはずいぶん長いあいだ、日本には中華思想はない、また「面子」という意識もないと考へてきた。

しかし、明治維新をあれこれ考えるうちに、維新の志士がとなえた尊皇攘夷というスローガンは「中華思想」だ、さらに遊れば本居宣長にもある思想だ、と気づいた。中国

の古典を「四書五経」として尊敬しているうちに、島国のわれわれの先輩は、かれらの中華思想が鼻につくようになり、自分たちの自前の思想が欲しくなったのである。そこで「大和心」をいい、「尊皇攘夷」をいうようになった。

わたしはさらに、「尊皇攘夷」思想というのは浅薄だと考えるようになった。この思想の皮を一枚めくれば、中味はなにもない。これは実体のない思想なのである。中国のばあいは大陸で生まれた思想だから、「まんなかにいるぞ」と自慢しても、これは実体がある。悲しいかな狭い島国では、それ（まんなか）は自慢できない。すぐ海にでてしまふ。

一種の熱狂がこの思想をもてはやし、もてはやされた思想がひとびとを挑発したのだ。空疎なスローガンだった。

「中華思想」の実体

そこで、日本の「尊皇攘夷」思想から、ふたたび「中華思想」という思想にたちもどると、中国のこの思想にも浅薄なところがあると思う。しかし、わたしが要約した一点は実体がある。事実そのものだから、浅薄ではない。わたしが、浅薄だと思つたのは、中央を強調する点である。

まん中にあることがそんなに貴重だろう

か。いわば付加価値にすぎない。いまのひとがブランド商品に眼の色をかえてとびつこうなものだ。中央は周辺が存在するから、中央である。ただ、それだけのことではないか。しかし、古典をさぐると、かなり以前からこの付加価値が強調されている。秦より以前、春秋戦国の時代があった。その春秋時代、魯の国ではその歴史が「春秋」と称されて残っている。魯の隠公元年から哀公四十四年まで、つまり紀元前七二二年から紀元前四八一年まで、二四〇年間の年代順の記録である。魯の国の史官がしるしたものを孔子が整理して書物にした、と伝えられている。

『春秋』の記述は簡単なもので、注釈が（む）しる解釈といつたほうがよい（つけ加えられ、「伝」と称された。「左氏」「公羊」「穀梁」の三種類があつて、「春秋穀梁伝」「春秋公羊伝」「春秋左氏伝」と称された。それぞれ解釈がちがつ。これらの三伝のうち、もっとも過激なのが「公羊伝」である。過激といつのは、愛国心が強烈で、「夷狄」を貶めたいいかたをしているからである。よく引用される箇所であるが、つぎのようないかたをしている。

「夷狄が中国に侵入してきて、中国の民衆を捕虜にすることを許さないのだ」（不與夷狄之獲中国也）

「夷狄が中国に侵入してきて、主人としてふるまうのをゆるさないのだ」（不與夷狄之主中国也）

それそれ莊公一〇年（紀元前六八四年）昭公三年（紀元前五一九年）である。

ほんらい中国の範囲に属する土地に夷狄が侵入してきて、住民を捕虜とし奴隷にしたことや、中国の域内で戦争をして、しかも勝利することがあつた。それを「春秋」はハッキリしるしていない。それで「公羊伝」は引用したように、その事件のイミを解釈したのである。学生の質問に答えるというかたちで、記述されている。

では、この記述で、夷狄が侵入してきたとされているのはどこか。

・莊公一〇年の簡条「いまの河南省

汝南県

・昭公三年の簡条「鶏父」いまの安徽省

省金寨県、河南省固始県にまたがる。

せいぜい、いまの河南省あるいは、隣接の安徽省なのである。長江沿岸というよりは長江の北を流れる淮河流域といつたほうがよい。これが当時のかれらの自称する「中国」だったのだ。

拡大する中国・中華思想と罵詈

だとすれば、いまの「中華思想」が「中国」

だと認める地域はあまりにも拡大されては
ないか、という疑問が生じよう。

これは古代、紀元前七、六世紀における
事件であり、その事件についての、ややのち
の『公羊伝』の筆者の時代の解釈というにす
ぎない。

とはいえ、ここにみられる強烈な自己主
張こそは中華思想の核心なのである。強烈
な自己主張というところが肝心なのだ。

清朝末期、革命を起こそうと血を燃やし
たひとびとは、『公羊伝』を革命の經典とし
たというが、つまりはこのような箇所に関
鳴し、それを現代（当時の現代）に適用し、
清朝をたてた満州人を「夷狄」だと罵った。
強烈な自己主張と他者への徹底的な罵倒。
これが「中華思想」のすべただといっわけ
ではないが、いまの生活場面においてもと
きおりみかける。自分に正義があるうとな
かろうと（正義があると信じているのだと
はいえ）相手を批判する。そのついでにあら
ん限りの罵りの言葉をならべる。

口からでた言葉が汚物になって積み重な
る光景が『不思議の国のアリス』にある。も
はや罵詈雑言はたんなる言葉ではない。「実体化
した汚物」といえる。

幕末の志士は、言葉よりも刀をふるって
西洋人に斬りつけ殺害した。刀の日本と言

葉の中国。どちらがいいともいえないが、愛
国心の裏側のもう一面である。

ただしわたしは、ここで「中華思想」を賞
賛しようとか、批判しようとかするもので
はない。原型をたずねて、古典にたどりつい
たというにすぎない。

「中華思想の復興」といっても、わたしは
中華思想の復興によって理想郷が出現する
といっているのではない。中華思想が強く
意識され、主張される状況を想定している
のである。

用語の流行

中国の知識人といえども「中華思想」に関
心がないのが現状である。むしろかれらは、
アメリカやヨーロッパの学者や研究者の概
念や用語を利用して、自分たちの国情を分
析しようとしている。その論文をよむと、概
念や用語が共通だから、日本の学者や研究
者にわかりやすく、あなたが共通の知識交
換の広場がそこに成立したかのようである。
しかし、そういった概念や用語には流行があ
る。やがて流行おくれとなり、忘れられる。

いま流行の、一種の脅迫観念をもつてい
われて、日本ではやりの「グローバリゼー
ション」、中国語でいう「全球化」もどれく
らいの生命力をもつものか。本稿を校正し

ている現在（平成一三年六月初旬）、この用
語ははやくも消えかかっている。

用語はきえかかっているが、ことからは
進行している。これからも地球化、無国籍化
という現象は現実的にひろがるだろう。反
面、これにたいする「ナショナリズム」も、
草の根の保守主義として生命力をよみがえ
らせるだろう。

中国研究の新しい方向

「グローバリゼーション」という普遍化用
語にあまり賛成ではないが、その反面の、
「ナショナリズム」にたいし、わたしはかな
りたちいってのべてきた。

「ナショナリズム」を、わたしは民族主義
という意味にとってきたが、むしろ主体的
な自己認識とつけとていいと、ここまで
しるしてきて、思うようになった。狭い意味
の「愛国主義」の議論は、ここでは論外とし
たい。

「グローバリゼーション」はもつぱら経済
面の現象ではあるが、思想面においてもみ
られるようになるだろう。しかしそれは逆
に「ナショナリズム」に栄養を補給するの
であって、「グローバリズム」が普及するほど
「ナショナリズム」は台頭するのだ。

このことを気づかされたのは、小熊英二

「グローバリゼーションと日本ナショナリズム」という論文によってである。また二〇〇一年四月の北京大学における、カルビー日本基金主催の連続講座における講義である。

「市場開放要求や消費経済の浸透といった経済的グローバリゼーションにたいする反発が、日本においてもナショナリズム台頭の基盤となつてゐる」。前出「グローバリ化した中国はどうなるのか」二〇二頁。

この設問にたいする答えが、じつは以上のような中華思想についてのわたしの議論であつた。あるいは小熊氏と一致しないかもしれないが。

「グローバリズム」が直線的に普及浸透するとは、わたしは考えていない。

「今後ともグローバリゼーションの傾向はアジアにおいても拡散することはあつても縮小することはなからう」と同時にアジアにおいてリージョナリズム（地域主義）への志向性も強まること予想される」と、国分良成は二つの傾向を指摘している。前出「グローバリ化した中国はどうなるのか」四六、四七頁。

さらにこのついでに、
「アジアにおいては二〇年後七国民国家としてのナショナリズム（民族主義）はいぜんと

して強く残存するであろう」と上、四七頁。「国民国家」という用語は、わたしはあまり理解できず、「残存する」という評価はともかく、いつていることの趣旨は賛成である。

グローバリゼーションとナショナリズムの中で

台湾問題は中華復興という大きな流れの中で、部分的にせよ全面的にせよ解決されるでしょう。その大きな流れが、まずまずこれから強調されると思ひます。

地理的な中国は存在しますが、地理的な中国の中で暮らしている人すべてが、朝から晩まで中華思想を唱えているわけはありません。講演で中華思想の話をしたところ、質疑応答のさい、日本に来てゐる中国人の留学生に、「先生のおっしゃつたようなことは、ぼくは考えていません」と反論されたことがあります。また、「中国」は「中華人民共和国」の略称としてあると同時に、そこにしばしば歴史的概念としての「中国」が入つてきて、中華人民共和国や中国共産党に比べて、認められない概念も含まれてゐるかも知れません。

そのように、わたしの言つ「中国」とは、曖昧模糊とした輪郭のはっきりしない

中国ですが、そもそもお互いの曖昧な概念で成り立っているのだから、認めていいじゃないですか。

うえにのべていることのくりかえしになるが、中国大陸に暮らすかれらが朝から晩まで「中華思想」に執着しているということはありません。したがつて、中華思想についてもできるだけ言及しないほうがよいと思つてゐる。

しかし、レッテルが外部から貼られ、しかもあまりにも内容とずれているので、それを訂正しておく必要があつた。先の留学生の発言も貴重である。新しい思考の芽がそこにはある。

そもそも「中華思想」とは、あくまでも外から貼られた概念であつて、中国人自身が中華思想について自ら説き明かすのは不可能なのです。つねにほかのテーマで語られるものです。それがこちらから見ると中華思想にみえるのです。ですから、「中華思想」というレッテルを貼るときは、ある種の理解不可能な部分を含んでいるのです。

たとえは教科書問題（侵略についての記述が歪曲されている）、靖国神社参拝問題（公人が私人かにすりかえられている）、南京の問題（虐殺の人数を問題にすることが侵略を認めるか認めないかの問題としてつきつけられる）なども、中華思想に関連させて論じることができる。しかし世間一般の中華思想について偏見がある以上、まずこの実体をみようとしたのである。

そこで、そのネガティブな側面を払拭しようという衝動もはたらく。ではどうやって取り除くかという点、外圧によつてです。それが今の中国の知識人が至上命題として受け入れている、グローバリゼーション言説なのでしよう。負の遺産を清算する改革は自力だけでは困難だが、グローバリゼーションでいわれていることをかかけて実行していけば、部分的でも改革は可能だという心理でしょう。

そのような状況で出てくるのが民族主義（ナショナリズム）でしょう。中華復興の時代とわたしがいうのも、じつはそういう背景においてのことです。日本のナショナリズムも台頭するでしょう。そういう流れのなかで、日本におけ

る憲法改正論議もわれわれの視野に入ってきているのだと思います。

日本ナショナリズムの多義性

このような見地に立つとき、「中国には五六の民族がいるから多民族国家だ」といふ決まり文句が発せられ、ほかの国や地域の民族問題から中国における民族問題を類推することは、かえって現実をとらえにくくすると考えられよう。

台湾問題については、まえの引用のなかで述べたとおりである。心理的に考えるべき要素をふくみ、「中華思想」のもつさままな側面がうかがわれよう。

ひるがえって、日本のナショナリズムについてのべると、日本では「ナショナリズム」が限定された一定の意味をもたない。外来思想、外来勢力（文化をふくめて）に反発する自尊心といったものが、「ナショナリズム」と命名されているが、カタカナでなくしるすとは、国家主義、民族主義、国民精神、民族精神、愛国精神、皇国思想、いろいろな用語がある。

一般的な語感としては、いずれ悪い思想と認定されていると思われる。それで、カタカナで、「ナショナリズム」という用語で論じ

るのだ。「ナショナリズム」という用語で、「ナショナリズム」を論じるひとはたぶんその用語の実体には賛成でない。

わたしは「ナショナリズム」という用語を耳にすると、「これをもつばら民族主義として考えてきた」「民族」といつても、たとえば旧ユーゴの解体ともなつて噴出した民族紛争などをみると、かまるるしく割り切れない。愛国心などは、わたしがとしてはじつさいは気恥ずかしい話で、「ここにとりあげたくない」というのが正直な感想である。けれども、そんなに毛嫌いしなくてもいいだろうとおもう。

現在の日本で国家や民族や愛国心を考えようとするとき、考えようとするこ自体が「ナショナリズム」を志すようにみえる。しかしそれはや、かつての右翼団体がスローガンとした偏狭な皇国思想などは、異なるのである。

中国がそついつた日本の方向を指さして「軍国主義だ」と指摘するのは、その心情はわかるが、日本のナショナリズムにたいする評価としては正確でないとおもう。（「正確」は中国語では「正しい」という意味で使われるが、ここではあくまでも日本語の「正確」である）

いまの日本のナショナリズムがただちに

戦争につながるはおもわれぬ。

価値観はあるのか

価値観というのはなにを指すのか。世界観、人生観、生きがいといった、この世で生きていくうえで理想とか、目標とか、これらをはっきりと定めていっているのだろうか。

いまの中国の民衆は、もはや社会主義を価値観としていないだろう。そうでない人間がいるとしても、主流ではないだろう。では知識人はどうか。

大学の教授たちの住宅が「商品化」され、買い取るようすめられ、ひととありこれが終わった（この面では市場経済である）。買い取ったあと、自分もちで内装をおこなう。これも終わった。新居に引越すことはだれでも嬉しいことである。教授たちも喜々としている。

買取りの値段も市内で一般に売られているものよりも安く、勤続年数に応じて値引きされた（この面では社会主義である）。

したがって自分の理想はこれこれこうだが、国家を愛して、国家に貢献したいと思っているとかが、話題にならない。たとえ考えていても、外国のたまたま来訪した客人に、打ち明けるわけがない。

だからといって、かれらは金銭や地位をの

み追求し、あたまのなかに空っぽだから、グロ・バリゼーションを注入してやれば、実際の感覚をもった人間がふえるだろう、とはいえない。いまの政策のもとでは共産主義が直接の目標ではないから、むしろ普遍的な価値としての人権思想や民主主義がうけいれやすいだろう。したがって、政府当局にたいしてこれらを要求するだろうと、きめてかかるのも、外部の人間の空想にすぎない。人権や民主主義の概念は、それなりに長い歳月をかけて、それぞれの国家や民族のなかで育ってきたのである。

これらが（人権や民主主義が）普遍性をもっていることはわたしも否定しないが、疑念はその普遍性といえども、これを提唱する大國の利己心とまったく無関係ではないだろうということである。偏狭な愛国心には賛成できないが、愛国心をもたない人間ばかりの社会も味気ない。結論としては、つぎのようなところへいきつく。

わたしは、「アジア的価値観」はあると思います。これから発見すべきものかもしれないけれども、それは精神的なかたちで存在する。グロ・バリゼーション（地球化）というとき、物質的な

ものに基礎を置いた経済的な戦略としての意味合いが強いですね。そこで、アジア経済の再生にとって日・中・韓の基軸が不可欠だ、というような主張におちつく。そのような提案は、もっともだとわたしは思います。

「アジア的価値観」というのは、物質的な豊かさを求めながら、精神的なものの価値を否定しない。

日本もアジアのなかにおいて、絶えず精神的なものに戻っていく必要があります。

ここで冒頭の設問「中国とは何か」にたしかえると、答えは端的に「中国は大國である」というところになったが、しかしわたしは、そこから出発して、「引き算」をしようということではないことは、本文のべたとおりである。

わたしとしては、「中味としては、歴史と思想がまつた人間が存在する」といいたい。その歴史と思想が渾然一体になったのが「中華思想」というものだろう。少なくとも、そこまでは理解することができるのではない。

この設問とあわせて、しばしば問われる「問い」については、拙著『中国はどこへ行く

く 毛沢東初期詞文集』岩波現代文庫で論
じた。この巻頭特集の題目もこれに焦点を
あわせている。

中国はどこへ行くのか。
わたしの答えは、
・どこへも行かない

である。岩波現代文庫二九七・三〇四頁参
照。
ただし、このように端的にしるすと誤解
をまねきかねない。訳出した毛沢東の諸論
文、およびわたしの評論を本稿とあわせて
ご覧いただきたい。

飛龍在天
祝中村公彦君
蒼蒼社十七周年
竹内実書

庚辰吉日



思想とイデオロギー

ここまで考えてきて、「中華思想」が拡張
していったばあいはどうなるのか、という
疑問がわたしの内部に生じているのに気が
ついた。

一般的にいつて、領土を主張することは
相手国の民衆にとって不安の種である。「思
想」は実体とバランスを保持するが、イデオ
ロギーは思想が実体と不均衡になったもの
である。

たとえば中国の領土の最南端は赤道から
わずか三度の曾母暗礁である。東はフィリ
ピン、西はマレーシアにかこまれた（日本
海に似た）海域が軍事的な要地として浮上
し、国際社会に突出するとき、思想は「イデ
オロギー」に変質するだろう。

しかし、いまはまだそのような軍事的段
階にはない。しかも軍事的に主張しようと
すれば、財政的負担は国力を超えるのでは
ないか。周辺諸国との経済交流にもヒビが
はいる。

賢明な指導者とはバランス感覚にすぐれ
た人物をいうのである。

（三菱総合研究所編『中国情報ハンドブック』二〇〇一年版より転用）